

2015.12.1

現代俳句千葉

119号

千葉県現代俳句協会創立 三十五周年記念俳句大会を終えて

会長 大畑 等

千葉県現代俳句協会は発会式以後十周年記念俳句大会が行われ、その後は五年ごとに記念俳句大会を開催してきました。三十周年のときは「東日本大震災」のため中止となりましたが、日を改めた総会で行事の一部をとり行いました。

五年を区切りの記念俳句大会には大きな意味があります。日々経過しているなか、会員個人においては俳句に対する考え方の変化もあるでしょうし、入退会による会員の顔ぶれも変わります。協会運営においても、ときどきの俳句環境により変化しています。そういうなかでそれぞれが振り返る、今一度足もとをみる、五年という歳月はそのような節目に思われます。

この記念俳句大会では顧問によるシンポジウム「千葉県現代俳句協会の三十五年」をとり行いました。昨年末に『合本 現代俳句千葉』

目次

創立35周年記念俳句大会を終えて …	1
俳句と出会って見えてくるもの …	2～3
シンポジウム－発足から現在まで－	4～5
記念講演「女性俳句の世界」 宇多喜代子 …	6～8
諸家近詠 ………………	9～12
ひろば・津田沼研究句会報告 …	12～13
青葉研究句会報告・柏研究句会報告	13
新会員・会友紹介 ………………	13
図書紹介 ………………	14
会員・会友の近況 ………………	14
掲示板 ………………	14

が刊行されましたが、ここには千葉県現代俳句協会の歴史が記載されています。この歴史を創ってきた顧問の方々の生の声を聞こうと企画しました。わずかな時間でしたが貴重なお話を伺えたと思います。

このシンポジウムは内から足もとを見ようとの試みならば、外からもまた足もとを照らそうと、現代俳句協会・特別顧問の宇多喜代子先生をお招きしてお話をいただきました。演題は「女性俳句の世界」でしたが、大きくは男女に別のない問題－作句の態度を示唆されました。じわじわと後から効いてくるお話であったと思います。

最後にこの千葉県現代俳句協会を支えてくださっている会員の皆様に感謝の念を表します。有り難うございました。そしてこれからもよろしくお願い致します。

千葉県現代俳句協会創立三十五周年記念大会

―俳句と出会って見えてくるもの―

実行委員長 渡辺 澄

「千葉県現代俳句協会創立三十五周年記念大会」は、平成二十七年十月二十五日(日)

「ブラザ菜の花」に於いて開催され、総勢、一〇四名の参加をもって盛会裡に行なわれた。

会長、実行委員長の挨拶にはじまり、来賓として、現代俳句協会から前田弘幹理事長、東京都現代俳句協会より松澤雅世会長、東京都多摩地区現代俳句協会より水野二三夫事務局

長、そして神奈川県現代俳句協会より吉田功会長の紹介。

前日に本部の現代俳句協会全国大会が東京で行なわれたにも拘らず、疲れもみせず来葉くださったことに深く感謝。これら各地区の支えは、目には見えないが、大きな励みになることは確かである。

次にシンポジウムに移り、「―発会から現在まで―」と銘うって諸先輩の話を伺った。

今回は投句形式も「一人二句」と絞り、よって定例の会の千何百句という作品集とは異なり、三三四句即ち一六七名の出句となった。

特別選者には従来の会長・副会長・顧問に加えて、宇多特別顧問と来賓として千葉現代俳句から武田伸一・鳴戸奈菜の両氏にもお願いした。

作品集の後半には創立時の総会の写真。協

会のため、俳句のため汗を流してください。方々。古い写真はうれしくてさみしい。更に「千葉県現代俳句協会の歴史」が年代順に表出され、「現代俳句千葉」第一号は、昭和五十五年と記されている。今、手にしている一九九号を見て、俳句はただ俳句を書くためにのみあらずと思えてきた。



開会の辞

(記念大会の司会者は事務局の高木一恵さんと高橋宗史さん。披露は松澤龍一さん、星野一恵さん。懇親会の参加者は六十三名で、司会者は徳吉洋二郎さん。余興には会員の内田庵茂さん、椎名鳳人さん、矢野忠男さんが出演。写真は細野一敏さんと徳吉洋二郎さん。)

入賞作品

千葉県現代俳句協会会長賞

夏帽子どこに置いても祈りかな 青木 一夫

毎日新聞社賞

泣いた分笑える余生花すずき 山中とみ子

千葉日報社賞

白桃を浮かせて水が若くなる 岡田 淑子

特別優秀賞

油蟬つかむ拳銃ほど熱し 吉岡 一三

優秀賞

たましいの抜けるまで佇つ捨て案山子 椿 良松

利根川は大きな切字つばめ来る 岡田 淑子

青大将ひとこいしさの長さかな 荒井 玲

手の平に軽ろき飢あり彼岸花 小高 桂子

仰向けの蟬蟬しぐれ聞いている 羽村美和子

口出しも手出しもすまい浮いて来い 加藤 法子

夕端居ことばの棘の抜けぬまま 馬淵 津枝

うしろから戦後の生まれつくつくし 水野 禮子

遠雷や龍になりたい木がいつぼん 星野 一恵

死ぬちから少し残して曼珠沙華 小張 直子

秀逸

臍帯につながっている大夕焼け 石井紀美子

戦知らずの水鉄砲で撃たれけり 新井 秋芳

ひまわりの首から下が基礎である 野口 京子

天牛や地に身を伏せしことありて 田口満代子

割り箸のささくれており終戦日 大川 竜水

戦争の足音がする夏の草 岩見ちづる

かくれんぼ見つけに來ない大西日 なかもと淑子

忘却を歴史と名付け夏の果て 秋尾 敏

村一つ虹が跨いで散髪屋 山崎 政江



会場風景



司会のお二人



山中とみ子さん



宇多先生と



内田庵茂さん



恒例の踊

佳作
杖は身のひとつと思え雲の峰
髪洗うさぶさぶ狼退ける
遠い日の蟬をさがしに木に登る
啓蟄や值札の下の值札見る
ストローに歯形沖繩慰霊の日
兜虫だいすきジャポニカ学習帳
水打つや石に貌あり声のあり
起し絵の山河ほどよき冥さかな
八月の海大きな口を開けている
母を括り祖母を括りて凌霄花
鬼灯をこの世に鳴らす口がある
月天心おんなが銀の鍵を出す
白球のストンと落ちて夏終る
私はわたしときどき水すまし
安房上総火の山はなし青蛙
銀河濃しその真下なる無言館
誰からも見えぬ花野にゐるらしく
本当の声で鳴けない羽抜鳥
爪を塗る金魚一つを追いな

明石春潮子
細野一敏
青木一夫
高橋富久江
東 國入
坂間 恒子
森 孝子
黒澤 雅代
石井紀美子
清水 伶
清水 伶
佐藤 晏行
矢野 忠男
森村 文子
荒井 玲
神作 仁子
千葉 信子
秋尾 敏
山崎 政江



岡田淑子さん



青木一夫さん



来賓の方々と



吉岡一三さん



御馳走



鳴戸奈菜さん



椎名鳳人さん



矢野忠男さん

シンポジウム

千葉県現代俳句協会の三十五年 — 発会から現在まで —



顧問の方々

シンポジウムは「千葉県現代俳句協会の三十五年—発会から現在まで—」と題して、これまで協会の屋台骨を支えて来られた顧問の皆様にお願ひした。メンバーは伊藤希眸、小出治重、塩野谷仁、高桑婦美子、武田和郎、三苦知夫、山中葛子、横須賀洋子の猛者たち、司会は現役役員の中では最も良く経過を知る会長の大畑等。発会の頃の事情に詳しい初代事務局長の武田伸一氏が、都合により欠席されたのが惜しまれた。なお、大会作品集の未

尾に「千葉県現代俳句協会の歴史」が略記され、記念大会等の写真を掲載して討論の資料とした。

シンポジウムは当然、昭和五十五年の発会時の様子から始められた。トップバッターは小出治重さん。当時は現代俳句協会に入るために一定の票数が必要で、やっと入れたと思っただけならいきなり副幹事長を仰せつけられて困った、と苦労話を披露された。

続いて初代会計幹事の山中葛子前会長。木村光雄さんからいきなり県協議会を発足したいとの話があり、津田沼の銀座アスターで話し合いをしたこと、発会ときに本部長の横山白虹氏が、創設は難しいが組織を維持することはもつと難しいと厳しい挨拶をされたこと、懇親の席で皆が手をつないで輪になったときに、白虹氏の隣に行き一緒に「星影のワルツ」を歌ったことなどを話された。

資料の発会式の写真には、白虹氏と宮本由太加会長を中心に、本部から川崎三郎、阿部完市両氏、大木五大夫副会長らと共に、若き日の山中さんが並んでいる。

発会の前からの事情を知る横須賀洋子氏。当時はまだ現役の人が多かったので、打合せの会場探しに苦勞し、ない場合は宮本由太加、平川雅也、河合凱夫さんたちと自分の家で会

議を行ったとの話をされた

司会者から発足の翌年、色紙短冊を展示・販売する「現代俳句名家展」を開催していましたがと訊ねられた高桑婦美子さん。「現代俳句千葉」二号から参加してはいますが、名華ならぬ身ゆえ、名家展には直接関わらなかつたそうです。

その様子を知っている横須賀洋子さんが、高い短冊を沢山持っていたのは宮本由太加さんですと暴露。新旧・内外の色紙短冊を集め千葉の昔の奈良屋でやりましたが、結構購入して貰い貴重な資金源になりましたとの話。その後、松戸や船橋でも開催し、会場の賃料も高いので長くは続かなかつたが楽しかつたとのことでした。

続いて塩野谷仁さん。八号（昭六十年）に武田伸一さんが「塩野谷仁句集」を紹介していますがとの質問に、当時はまだ千葉県に来ていないんです、妻の実家が佐原にあるもので、そこを拠点に東京の周りをぐるぐる回っていて、その後千葉の方に定住したとのことでした。

事務局長などを務めた武田和郎氏。春の吟行は養老溪谷で箭狩りばかりやっていたようですがと訊ねられると、当時は吟行会の参加人数が多く、我孫子の手賀沼周辺に行った時だったか、選句が終らない内に宴会になつてしまつたと逸話が披露された。

また司会者から、会報の充実が図られたのも武田さんの頃だったのではと聞かれると、大木五大夫先生に命じられて十三号（昭六十

三年）から広報担当を担うことになったが、やるからには文芸誌のようにしたかった。年三回の発行を定例化し、書き手として村井和一人さんをデビュウさせたこと、上総・下総・安房の房総俳諧三国史を企画掲載するなど楽しかったとの話をされた。

元会長の三苦知夫さん。二十周年（平十二年）の頃は協会の上り坂で、会員数も五百名を超えるようになった。記念大会後の懇親会に正調木更津甚句を披露をしたこと、句集などを集めて著書まつりをしたことなどが思い出されると話をされました。

二十五周年の頃はどうかと質問された伊藤希眸さん。主体的に関わったのは三十周年（平二十三年）です。そちらを話しますと、合同句集刊行委員長を仰せつけられまして、「俳句集成二〇一〇」の編集に携わりました。二、三二名の方の参加を頂きましたが、しかしこれは皆さんの協力がなければ出来なかつたことです。場所取りが難しく、いろいろな場所に行つて校正をしたことが記憶に残っています。一生の思い出になりましたと語っていました。

その三十周年の時に会長だった山中葛子さん。三十周年の実行委員会の皆様には本当にお世話になりました。全員が一丸となつて三月二十日に予定していた記念式典に向つていたんですが、ご承知のように十一日に東日本大震災が発生しました。二日後の十三日に最後のリハーサルを余震の中で行いました。やがてこのまま式典を挙行することに疑問の声

が湧き起り、その日の夜十時か十一時頃中止の決定をしました。そして事もあろうに、その日に元会長の村井和一人さんが亡くなられました。翌十四日に各役員に中止の電話をしました。翌十四日は午後になってからでした。この時、大畑さんや秋尾さんの処理してくれたパソコンの威力に感謝したものです、と当時の切羽詰まった状況を語っていました。

最後に、司会者から今後の千葉県現代俳句協会への期待、お叱りをと促されて一言。

伊藤希眸さん。もつと活動して、作品もたくさん残していただきたい。

高桑婦美子さん。三十周年の時に基金担当をさせていただいたが、ご協力を頂いた皆さんに感謝します。この資金は活動の基礎となるものであり、活用して貰いたい。

塩野谷仁さん。千葉は全国で四番目に会員数が多い。更に新しい会員の獲得に努力していただきたい。

横須賀洋子さん。千葉は非常に上手く運営され、組織もよく出来ている。これからも仲良くやっていただきたい。

武田和郎さん。市原市俳句協会では生徒の俳句を募集し、今後の担い手を開拓しているが結構なことである。

小出治重さん。なぜ会員が増えないか考えていくべきだ。小中学生の指導も方法の一つである。

山中葛子さん。発会から続いているのは、ここでは小出先生と横須賀洋子さん、私の三

人だけです。小出先生は欠席したことがなく、見習うべきだ。俳句は参加することに意義があるんです。

三苦知夫さん。役員の八十歳定年制というのがあるが、高齢化社会が進行してくるとそれがいいのかどうか考える必要がある。

以上で終了とし、猛者たちを捌いてきた大畑司会者から感謝の言葉があり、千葉県現代俳句協会の歴史を振り返ったシンポジウムはお開きとなった
(並木邑人記)



千葉県現代俳句協会創立35周年記念大会

記念講演 「女性俳句の世界」 宇多喜代子 先生



改めて宇多喜代子でございます。会報の合本を見ましたが、これは絶対に大事なことです。関西地区現代俳句協会では手書きの原稿があったのですが、「阪神淡路大震災」でなくなっていました。記憶というものは曖昧なものですから、今は震災後の記録しか手元にない状態です。先ほどの話（シンポジウム）を聞いていましたら、お名前があがった方は懐かしい人ばかりです。村井さんも大事な人で、『現代俳句歳時記』の刊行にはなくてはならない人でした。現代俳句協会に入るのに小出先生は一回落選したとありますが、私は二回落選しました。当時は若い人ばかりでしたが、今と違って入会が大変な時代があったということをおぼえて思いました。

さて、私が俳句を始めたのは昭和二十年代の終わりの頃、おじいさんのなかに入っていったわけですが、句会が終わるとおでん屋に行くのですが、「おまえは帰れ」ということで、仲間に入れない。今だったらあの話が出る、そしてこう言えるということも、皆さん逝ってしまったからそれも出来ない。今日のこと

もまた、後々同じように言われるのでしょうか。さて、この題は今更という気がしないでもありませんが、今日は、八十歳になった私の俳句人生から女性俳句について話してみようと思います。女性俳句について語る場合、定型というか定番があります。俳諧の時代は誰々、明治の時代は誰々という具合です。そしてホトトギスで巻頭になった最初の女性は竹下しづの女、そして星野立子、杉田久女が巻頭をとります。昭和の時代ですね。4T（星野立子、中村汀女、橋本多佳子、三橋鷹女）と言われた人たちがいました。そういう人たちが柱になって、定型・定番となって語られます。これは分かりやすいのですが弊害もあるようにも思います。今回取り上げた女性俳人は定型・定番から外れた人たち、皆一生懸命努力し良い作品を残しているのですが、何かの折に忘れられてしまう人たちのことです。そして俳句は人に知られるために作っているのではない、自分の何かを満たすために作っている、そういうことをはっきり感じさせる人たちです。

こういう俳人をきちんと残していくには個人の力では限界があることも確かです。第二回角川賞受賞の沖田佐久子さんは社会性俳句隆盛の頃に働く女性の俳句を作っていました。私は沖田さんの最後の句帳を預かりましたが、

個人の力では限度があつて、公にする手立てがありません。この頃、男性を抜いて賞をとると好奇の目で見られました。甥御さんの縁談が破談になるとか、女だてらに俳句を作る云々と、そういう時代でした。頑張つて作っていた俳句が埋もれてしまうのは本当に残念です。これは男女に変わりなく言えることです。そして定番から外れたところに共通した感慨をもつ本当に面白い作品がある、ということ。これからとりあげる女性俳人は、とりわけ高名ではありませんが、同じような立場でもつてその俳句を読んでみたい人であります。各人の句を綴つていけば昭和の時代が分かる、そういう俳人のことです。

■吉屋信子（明治29〜昭和48）

日脚のぶ拭かぬ机の埃かな

金塊のごとくバタあり冷蔵庫

初曆知らぬ月日は美しく

吉屋さんは少女小説を書いていましたが、戦争の時代に執筆を禁止されました。そこで俳句に親しむことになりました。虚子のお弟子さんで面白い句をたくさん作りましたが、小説では非日常の世界を書いてきましたが、俳句で日常を書きたいと俳句をはじめられました。「机の埃」なんかは小説になりませんね。そして「冷蔵庫」の句は、まだ冷蔵庫もバターも珍しい時代、一貫目の氷で冷やしたもので、昭和23年の句です。「初曆」の句は共通した感慨を読み取れます。

■及川 貞（明治31〜平成5）

ある時はものおもふまじと麦を踏む

堪ふべしと母は堪へにき京鹿の子

及川さんは馬酔木の方。及川さんは長男長女次女の三人のお子さんがみんな逆縁なので。長男はトラツク島で潜水艦で戦死しておられる。堪えに堪えた我慢の日々が読み取れます。

■稲垣きくの（明治39〜昭和62）

冬濤に思ひやまざる恋といふか

想ひ出す梅にゆかりの人ばかり

この方の句を読むと、何のために俳句をやっているかということがよく分かる。やっかいな恋をした人です。安住敦の「春濤」にいた人で、鈴木真砂女に隠れて見過ごされがちなのですが、真砂女さんに匹敵する俳人だと思えます。当時「真砂女の卯濤、きくの冬濤」と言われました。晩年は幸せな生活を送ったようで「梅にゆかりの人ばかり」の句からはその境涯を読み取ることが出来ます。

■田畑美穂女（明治42〜平成13）

何故の夫の不きげん蚊遣置く

顔見せに来て不景気の話いや

何人にならうとおでん煮てをけば

この田畑美穂女さんや後から出てくる三好潤子さん、津田清子さんとは随分親しくしていただきました。美穂女さんは薬種問屋の一人娘だったので。そして三歳のときに奉公に来た使用人と結婚したのです。船場の商人は跡継ぎを長男にするよりは叩き上げの番頭を娘の婿にして跡継ぎとしました。それまで呼び捨てにしていた人が、結婚を機に廻りから「旦那さん」と呼ばれ、急に空気が変わるわけです。「蚊遣置く」では、かつての番頭さ

んの奥様になつてゐるんですね。ここには美穂女さんの生活が書かれています。おでんを煮ておけば、何人家に来ようと取り皿を足せば良いわけです。美穂女さんはホトトギスを代表する女性俳人ですが、これが花鳥諷詠でしょうね、これでしようね。ここまで見て来まして、ホームドラマに出てくるような一般に言われる「幸せな」家庭の主婦ではない女性ばかり。美穂女さんは「ごりよんさん」ではありませんが、ついにお子さんはありませんでした。俳句をすることで各人の「何か」を助けてくれた、そのような作句人生でありました。

■栗林千津（明治43〜平成14）

冬の月明たかが人間ではないか

雲の峰上手に死んでやらうかな

栗林さんは「鶴」、「鷹」、「小熊座」に句を発表しました。伝統的な俳句も勉強した俳人ですが、人間の存在を、生身をシュールな言葉で表すようになって本領を発揮しました。この「上手に死んでやらうかな」の句や「火葬のとき熱いのは困る万緑」などがあります。私なんか散骨はまっぴら御免、金槌ですからね。ある看護婦さんが「死ぬときには最後の力がある、薬に死ぬ人はいない」と話していました。死ぬときというのは大変な

のですね。「冬の月明」の句、人間がどれほどのもんか、ということなんです。この人の句に私は刮目するというか、世間が開けた思いをしました。もつと読まれてよい俳人です。

■清水径子（明治44〜平成17）

蜂・男・死さへ遠くは美しき

鶴来るか夕空美しくしている

写生派かたはロマン派か冬かもめ

■中尾寿美子（大正3〜平成元）

はじめから烟でありし冬の姥

傘寿とはそよそよと葉が付いてゐる

このお二人は秋元不死男の「氷海」にいたのですが不死男亡きあと、永田耕衣のところで一から投句者としてやっていこうとした人たちです。永田耕衣の「琴座」は小さな俳誌でしたが、それだけに一人一人が良く見えましてね。耕衣先生はとても魅力ある爺様でした。私なんかは「須磨のじいさま」と呼んでいました。「遊びに来んか」と、よく呼ばれました。「今、テーマがないから、お前さんちょっと喋ってくれ」などと言われました。行く度に手製の胡麻豆腐を持って行くのですが、それを喜んで自筆の年表に「宇多喜代子、胡麻豆腐を持ってくる」と何度も書いていました。この永田耕衣居「田荷軒」にピンどめしていた舞踏家・土方巽の公演案内の一枚の葉書ももらいうけて、『半島』という句集を一冊書き下ろしました。

さて、清水径子さんは「写生派かたはロマン派か」と自分への問いかけのような句を残しています。そして晩年は死とか老いを終生のテーマとした俳人です。夕空など遠くのもの、を美しいと書く感覚が特徴的で、読み応えのある俳句を残しました。全句集も出ています。是非読んでみてください。

中尾寿美子さんここに掲げているように

面白い作品を残しました。ある程度満ち足りた後に、また「琴座」の雑詠欄から俳句を作っていました。

■文挾夫佐恵（大正3〜平成26）

炎天の一片の紙人間（ひと）の上に

二十世紀戦ありしよ初山河

文挾さんは反戦を生涯通して書いた俳人です。

■馬場移公子（大正7〜平成6）

亡き兵の妻の名負ふも雁の頃

飼はれるて眼は従はず露の雉子

この方は戦争未亡人で、金子兜太先生の御

父上（金子伊昔紅）のお弟子さんです。

■津田清子（大正9〜平成27）

栗甘くわれら土蜘蛛族の裔

無方無時無距離砂漠の夜が明けて

このあいだ亡くなられましたが、自分を

「土蜘蛛族の裔」と称していました。晩年に

ナミブ砂漠に行き、砂漠などでの季語はどう

でもいいんだ、と言いな

■寺田京子（大正11〜昭和51）

五体夕焼亡母の他は頼られず

日の鷹がとぶ骨片となるまで飛ぶ

是非全句集を出したいと思う人です。この

方の句は私のテキストでした。肺のご病気で

寝たきりだったのですが、独身の女が寝つい

たとき誰が面倒を見るか、ということですよ。

そういう句をたくさん作っておられる。

■菖蒲あや（大正13〜平成17）

旋盤のこんなところに薔薇活けて

路地の葬掃いても掃いても花が散る

下町の方で、小学校を出ただけで旋盤のお勤めにしました。凄まじい生涯をおくりながら良い俳句をたくさん残した方です。

■三好潤子（大正15〜昭和60）

行きずりに聖樹の星を裏返す

今死なば吾に老無し藤盛り

三好さんのところに泥棒が入って、そのと

きの取り調べのお巡りさんが榎本冬一郎でし

た。その榎本さんがきっかけで俳句を始めま

した。面白いお姉さんでしたが、この方も独

り身をかこつて俳句を作った人です。

そもそも女性の愛好家が自由に俳句を作り、

句集を出すようになったのは、今日は千葉の

35周年ですが、この35年前の昭和五十年の半

ばの頃からです。江戸時代の俳諧時代で俳句

を作る女性は尼さんか遊女でした。昭和になっ

ても俳句を作る女性は後家さんか病氣か、何

か分けのある人でした。うちの先生（桂信子）

は後家さんでした。ラッキーな人、うれしく

てしようがない人は俳句などする必要がなかつ

たのです。だから高柳重信はちよつとお酒が

入ると、「お前さんもあれか、俳句をしなけ

ればならないのか、不幸なのか」と、そう言

われました。そのときは分からなかったの

ですが、このような女性たちの俳句を知って

ると分かりますね。

ホトトギスに森川暁水という俳人がいまし

た。暁水先生に娘さんがいまして、私はこの

娘さんとても親しくしていますけれど、こ

の娘さんにどうしても俳句をさせなかつた。

俳句をすると不幸になる、ということ

だつてホトトギスの初めの頃に久女とか周辺の人で、いろいろ見てくると俳句をして幸せになった人はあまりいなくなつたからです。それが今と大きく違うところです。今は誰でもうと俳句をしていると嬉しいじゃないですか。

桂信子が最晩年にこう言いました。「長いこと俳句をやつてきて、俳句も難しかったけれども、後ろ指を指されないように生きることは、もつと難しかった」と。後家さんでしたから、この言葉は本音だつたと思います。

「だから、難しかったから、作品のなかでうんと遊んでやろうとウキウキした句を作った。ところが人は実録だと思つたら、この彼は誰かとか、そういうことはかり言うけど、俳句というのは心のなかで、句のなかで思う存分違う自分に仕立てることだつて出来る」と言つておりました。

本当に女の人が俳句を作るのに大変な時代を経て今日があるのですね。ですからジャーナリズムが取り上げたりマスコミが取り上げる句ばかりを面白がるのではなくて、やつぱり今日取り上げたような方が他にもたくさんいる。これをちゃんと読んで欲しいと思うのですよ。現代俳句協会もこういう人たちの句をこそアンソロジーに編んで、共有財産として読みたいと思いますよ。名のある人の大きな本ばかりじゃなくて、本当に懸命にやつてきた人たちの句を残したいですね。（拍手）

文責 大畑 等

当日は宇多喜代子先生の略歴と十三名の女性俳人が掲載されたレジュメが配布されました。各人とも五句取り上げられています。ここでは宇多先生の話に沿つて句を書き抜いています。

諸家近歌

林 阿愚林

鱗雲あんちきしよは何処にいる
もう誰のものにもならぬ鳳仙花
数式に恋した娘百舌鳥日和
出所の違う言の葉秋の水
蟻の列放射線上異常あり

中澤 一紅

ロゼワイン含めば旅の星月夜
山と川動くものなし秋の彩
秋扇仏心を宿して
蝸を聞きとめしるし耳の奥
秋空に忘れたままの記憶かな

戸邊 光一

人影の見えぬ村あり遠く雷
蛩とは友になれない闇がある
若竹となり大吟醸提げて来る
本音かな雨後の紫陽花青過ぎて
現役を退き光る夕蛩

政成 一行

閉ざされた回路ひとつに リハビリ句
文字盤たどるスローな指先の 思考
作句する端からこぼれる 何の花
幻影もまたこころの食事 白い時間
麻痺の娘逝く 雲のお椅子の揺れこち

細野 一敏

桐一葉戦前戦後戦中派
秋風や思わず正座御御御付
キヤパの死を踏み躪り行く曼珠沙華
色即是空是非非も無く鉦叩
スーパームーンスローモーションの麒麟

浪本 恵子

神宮のすいっちょ胸に来て止まる
梅檀の実や神宮の中空に
澄明な山々のあり実紫
灯台のゆっくりと点く神の旅
山積みのワゴンの本に銀杏ふる

樋口 博徳

叱られてアガパンサスの腕の中
かげろう降車ボタン押す陽炎村
よろしくよろしくよろしく木の芽風
あいつかも蟋蟀上り込んで鳴く
風花や「グリーンマイル」をもう一度

中村 棹舟

壮年に小志もなくていわし雲
ふるさとに忘れきしもの夕月夜
銀漢やいくさなき国見当らず
失いしものの重さや流れ星
枯野ゆく少年星を友として

長濱 聰子

少しづつ西へのめっていくすすき
あるがまま生きると決めてより涼し
望の月グランドピアノに艶布巾
冬紅葉湖底に朽ちしものの声
登山口塞ぎ山ごと冬眠す

普川 洋

蝶一頭蹄の音のかすかなる
風薫る死ねば詩人になれそうな
芝桜予定調和を超えている
解決をしないのも知恵ラムネ玉
青田風健忘症は生き易し

根岸 ナツ

吾のみで終るこの家や柿熟るる
八十路婆仕切りてをりし盆踊り
稔田にあきらかある風の道
月明り閉め忘れたる雨戸かな
雁渡し葬の献花にも序列

藤岡 尚子

鳥居いくつくぐれば叶ふ春の恋
桜餅佳き名貫ひし三姉妹
六月来みくじは大吉だつたはず
醫院てふ看板そのまま青葉木菟
実石榴や砲台一つ島にあり

保坂 末子

存うを信じて掬う秋の水
終戦日砂の熱きを噛みし爪
黒揚羽ふわり他郷の影ひいて
しばらくは生者の行進曼珠沙華
あの日から沖を見る癖いわし雲

藤井 遥

寒に入る足首ほそき相撲取
百円均一葉付大根さびしからう
夏帽の紺や無印良品店
茄子の花元気でまめな夫のゐて
八月のポストに溜まりるし誤算

福田志津子

妣の声仕立て直しの春着かな
天守より遙かに展ぐ花の雲
サンダルのパディキユア真赤熱砂蹴る
爛爛とひまわり畑のゴッホの目
ところてん一本箸のおどりけり

諸家近詠

広瀬 侘子

下手な愚痴もうやめようと新茶汲む
椿咲く二人の姑になつており
いい人やめて爽やか足つて
根から茎無言の悶え凌霄花
夏休み子が裏返す兜虫

細根 栞

立春大吉でのひらに歓喜仏
天の声地の声木々の芽吹く声
凡夫あり一羽で帰る鳥のあり
人間に性というもの梅真白
観自在呆けるまで立つ葱坊主

畠 淑子

絶交と言いたいけれど猫柳
空襲忌ビアスの穴も今日も晴
鍼を打つわれは魚か狐火か
ドローン落ち便座蓋あく万愚節
綿菓子を洗うに似たり月兔

馬場 益江

さよならの決定ボタン春寒し
うつ伏せの足を預けて春の雨
先頭の健脚に蹴く熱風裡
電柱が男を繋ぐ秋出水
喋りつつ写真をごみにする晩夏

番場 松香

雷雨突風あとは少しのわだかまり
澄む水もやがてはなど手を浸す
秋なのに桜ムンクにはまけるけど
椋鳥や一羽離れて飛ぶ不安
一步二歩やがて落葉の深みへと

津高里永子

島ぢゆうの男が道に祭笛
えぞにうの蓄たくまし風脚
瑞鳥の羽根より晴れて山車の上
液状化する島国の暑さ
落蟬の跡の濡れをり隸書めく

浜谷 徹

カンテラの灯る鉄路や寒北斗
大鷲の利尻の山を掴みをり
弁天の肩に掛けたき毛布かな
膝小僧見ゆるジーンズ夏始め
盆道のアロハシャツやら喪服やら

羽村美和子

青葉谷ふと人消える駅がある
ほたるぶくろ老人一行擦れ違う
夕暮れの四隅あいまい青蜥蜴
戦跡の洞より湧き出て碧揚羽
仰向けの蟬蟬しぐれ聞いている

中村 直子

蓮の実とんで晴ればれとわが山河
爽籟や翼のほしき下り坂
行く道の遠く広がり鷹柱
冬めくや直線多き木々の影
耳奥に第九の余韻冬の風

藤田 富江

仁王立ちして夏草に負けている
とべバツタ地球という星危ないぞ
秋は風なり魂が声あげる
秋桜終章に置くアンダンテ
遠き着地父母のなき大刈田

半田 千枝

家訓などなし暗闇の鏡餅
芹摘んで先の人生変るかも
馬土偶肌じつとりと梅雨に入る
巻き揚げる網に碎ける後の月
柎や涙の痕あり聖母像

平木智恵子

天高し老人国にはしくも
不退転の銀のかがやき鬼やんま
林檎むくたびメビウスの帯となる
祝祭のごとし農家の烏瓜
ひとつ反るはリルケの詩片冬薔薇

永妻 和子

後期高齢しなやかに文化の日
起きぬけの葉男は懐手
皿小鉢ふやし温まる十三夜
ただならぬ気配速達のうそ寒し
冬仕度誰かを思う優しさで

檜垣 梧樓

夏帽やこの世の友の見舞ひしに
半跏して思惟いや秋思なすことも
秋風や方陣を為す兵馬俑
能登の塗師小路に消えてちちろ虫
萩乱る御陣乗太鼓昂れば

中村 博子

箸置き唐子人形小正月
マロニエの花引く波のごと癒えよ
九十九里影を消しゆく熱砂かな
新走り久留里城下の上総掘り
軍港より銅鑼の音冬の空を打つ

諸家近歌

並木 邑人

遅き日や君等の主語が行方不明
落雪の地の怯えなり秘密法
べらぼうと棲む田の神や春の果
憲法は死にますか今朝露を煮る
音楽や薄雲を佩く蓮の花

林 紀之介

蟬よ鳴け残る命を根かぎり
ゑのころのしなやかさ欲し老の身に
議事堂を囲むデモ隊天高し
熱燭や戦争の影ひたひたと
日向ぼこ一ト日生きれば一ト日老ゆ

浜名 儀一

聴くことに始まる介護蓮の花
邯鄲や黄昏といふ安堵感
削られて風を呼ぶ山男郎花
石庭に石の声聴く寒椿
燈火親し書棚に同じ本二冊

西澤 繁子

釘隠しの中に釘ある大暑かな
八朔の生れて三日の赤ん坊
満ちるとは寝ている赤子秋オリオン
初さんま少し太きを子の皿に
パンと切手コンビ二で買う秋の暮

林 ゆみ

桐の実のシュプレヒコール身の内に
桐の実の赤きところを忍という
秋の蝶なんじ梵字の化身なり
金木犀わたしにもある落し穴
世界から猫が消えたよねこじやらし

馬場 馬子

雑談に若き日の恋初笑い
謙信の城跡はるかに若葉の湯
お互に介護される身夕端居
災害復旧の起重機秋出水
葱ほめてからの付合い酒を酌む

鈴木加寿子

パイプオルガン識閥に込み秋立ちぬ
出迎えは木彫りの猫と雨蛙
重奏のエルガーほどよき花疲れ
過去未来消し月待ちの滝の音
梅雨寒のギター高鳴る反戦歌

廣谷 幸子

古い時刻表のようななるさるすべり
酔芙蓉地動説など知りませぬ
炎天下泳ぎつきたるけもの道
溽暑かながんじがらめの杭に影
残像のしつぽが走る青蜥蜴

沼山美津江

頭に給ぶ水晶の数珠涼新た
生類や音たてずゆく芋虫よ
つくつくし神木の天はてありや
この星に言語はいくつ鳥渡る
山里は透きとほりたり年用意

原島 典子

秋の風音をぶつけておとを消す
積み上げてもすぐに崩れる秋思の城
木の実落つくぼみは深く生命線
防虫剤匂うだるうか菊日和
燕帰る私もかけるポストまで

保坂ミエ子

樹木医の幹敲く音秋日和
龍田姫袖ふる度の火の記憶
探し物も生活のひとつ秋日濃し
黒葡萄生涯無口な父であり
辻楽士去りて舗道の冷ややかに

前田 孝子

青空にシュートを決めて卒業子
百歳の風誘いだす糸ざくら
万緑に呑みこまれたる大鳥居
草刈るや風の匂いを青くして
落葉掃く最終章という軽さ

中村 冬美

春浅し無音の山の地の火照り
さる国の流砂止まらぬ梅雨未明
星祭り隣りの星は住みよいか
ジャンケンの相手が消えた八月
雪しんしんジョーカー手元に留めおく

袴田 菊子

歳月を許して軽しいわし雲
シヨッピングカー重しれんれん烏瓜
スケジュール夫で満杯秋の暮
退院の介護ベットに小鳥くる
爽やかな笑みこぼしつつ訪問医

棗 梢伊

街のみなりユック背負へり三鬼の忌
缶の蓋パカリと開きし不死男の忌
白き巨船遠ざかりゆく林火の忌
達谷忌若き俳人いそぐべし
分類の本質にあり癩祭忌

鳴戸 奈菜

誰もいない私もいない公園の秋
露草や命は並べてひとつずつ
流山という駅前にある秋の暮
時雨忌の女ばかりの句会なる
昔から戦争好きな星われらが地球

原 悦子

無人駅降りて花野の人となる
運動会ひらがなだけの案内状
青田吹く風の奏でるピアニシモ
彼岸花折らねば前に進めない
着ぶくれの袖からこぼるぐち本音

なかもと淑子

睦まじきヒヨドリの庭遠くの地震
若い艶とどめて無念こがね虫
長月の月光菩薩の背の妖し
三ツ栗の押し合い家系絶えにけり
鼻のなきまねする人咳もする

野口 京子

霧の枕木目覚めぬ中に始発出る
糸巻きの糸が纏れしまま夜長
採血の菊一輪に昂ぶれり
一人居の夜を時雨に放囲され
可愛いがる猫より化けて小春の日

橋口 久子

末黒野や大手広げて深呼吸
一山を搦め捕るかや葛嵐
静けさの先に広がる草紅葉
鳥群れて一日だけの木守柿
頬杖の歎に影お秋の暮

ひろば

■ 市原市文化祭俳句大会

十一月一日、「沖」の新鋭広渡敬雄氏を招聘し、文化祭俳句大会を開催した。兼題の部は県内外から492句、中高生徒による第7回文芸コンクールでは10校から455句の応募があり、当日の席題句会は52人が出席して実施した。(並木邑人記)

☆ 兼題の部 / 新走・石・雑詠三句一組

市原市長賞

ひとり良しふたりなほ良し新走 伊東 泰子

市原市俳句協会賞

蟋蟀や男黙つて皿洗ふ 重田 忠雄

市議会議長賞

山塩にかすかな甘み新走 代田 幸子

教育長賞

届きは小石なりけり終戦忌 金井 綺子

文化祭実行委員長賞

カンナ燃ゆ平家流人の住みし里 山田香津子

☆ 文芸コンクール / 俳句の部

市原市長賞 市東中1年 石井 陽奈

シャーペンの芯が減らない夏休み

市原市長賞 鶴舞桜が丘高2年 鈴木礁太郎

夏祭りお面で隠す恋心

市原市俳句協会賞 若葉中1年 満永 悠大

海わけて歩いた夏の堂ヶ島

市原市俳句協会賞 市原緑高2年 村井須穂納

来年も千葉においてよ渡り鳥

□ □ 津田沼研究句会報告 □ □

(於：津田沼一丁目町会会館)

● 第二七九回 (平成二十七年八月十一日)

司会 林 阿愚林

白桃を啜るも陋居ヒューズ飛ぶ 大畑 等
ひとつ重荷おろす背の遠花火 池田 博臣
かくれんぼ見つけに来ない大西日 なかもと淑子
ゆつくり向日葵に添い少年消ゆ 横須賀洋子
しばらくは生者の側にいて円座 小林 実
過去帳にカタカナ多し草の花 楠見 恵子
蜘蛛の罟を抜けアメリカが見えくる 徳吉洋二郎
玉の井から拾ってきたる金魚玉 佐藤 晏行
蟬の穴今日のおまけは何だろう 林 阿愚林
暗がりへ過去へ遠のく祭笛 金子 未完
この星も後期高齢うりの花 深山きんぎよ
鉦叩独り住まひを励まして 岡田 淑子
長崎抱く白百合白く白く 大塚 弘毅
喪の報せ空白み来る熱帯夜 白木 暢子
孫一人昼の花火の煙濃し 股野 久子
冥王星いまさらぶれないで 前島きんや
縄文のたつき瓢箪売り糸瓜売り 吉野 精
ひとり居の句会帰りの夜食かな イザベル真央
白桃やおどらつつきという凹み 山中 葛子

● 第二八〇回 (平成二十七年九月八日)

司会 白木 暢子

矢印のごとき秋刀魚を二つ買ふ 深山きんぎよ
猫じゃらし頭の固い奴もいる 村上 澄子
秋の蚊をおでこに許すご老人 横須賀洋子
目刺ほど寂しくはなし老進む 岡田 淑子
右向いて左を知らぬ海鼠かな 林 阿愚林
木の実たち月光菩薩に抱かれて 吉野 精
押入れの奥へ総立ち曼珠沙華 楠見 恵子

二百二十日心身ともに生乾き
 将門に手向けの梨の坐りかな
 八月や伸ばし切つたる轆轤首
 うす闇を呼び捨てにしてちろむし
 量られぬ天地の重み竹落ち葉
 絵の中の絵に禁断の林檎かな
 秋高し居ながらにして大和路へ
 さつきから湧き出る蟻を掃いている
 御巢鷹の屋根吹きそむる秋の風
 秋天へ紫煙ひとすじ逝きにけり
 虫時雨真中に送る深夜バス
 鶏頭にそそのかされて赤を着る
 煙出た一九だぞ秋刀魚焼く

白木 暢子
 大畑 等
 徳吉洋二郎
 山中 葛子
 大塚 弘毅
 小林 実
 池田 博臣
 佐藤 晏行
 榎垣 梧樓
 前島きんや
 股野 久子
 なかもと淑子
 金子 未完

青葉研究句会報告

(於…千葉市民会館・第四会議室)

●第五十回 (平成二十七年八月二十七日)

司会 山崎 幸子

恐るべき猛暑するめを裏返す
 蛇消えてうっとり残る擦過傷
 楽しい方へ転がつていく木の实
 虫時雨諸行無常が騒がしい
 ざざむしや六十路半ばの昼の宴
 電流に囲われものの稲穂垂る
 取り消しの言葉が泥濘る溽暑かな
 つくつくしその奥ぼつかり静寂に
 旅仕度して水草の花の国
 黄昏や厠に貼りつく蟬ひとつ
 鬼灯を口にさみしい言いつを
 新涼や九頭身のナース帽
 桃熟すいずこも還る途中かな
 風鐸や禪問答と秋の雲
 爆音に負けてたまるか蟬時雨
 妻逝きて想ひばかりの日々なりし

三須 民恵
 芝崎 梓
 石井紀美子
 細野 一敏
 大畑 等
 並木 邑人
 長浜 聰子
 山崎 幸子
 細根 栞
 徳吉洋二郎
 加藤 法子
 矢野 忠男
 小林 実
 鈴木まほろ
 小高 稔
 大塚 弘毅

●第五十一回 (平成二十七年九月二十五日)

司会 椿 良松

生きている柱死にゆく柱秋出水
 傍線引きの『狂人日記』蚯蚓鳴く
 子育ては失敗だつたもみずれる
 静脈のじいんじんと曼珠沙華
 退院許可二百二十日の風の中
 百舌猛る後期云々生きてやる
 曖昧は嫌い石榴が口を割る
 省略の多き七十路きぬかつぎ
 総立ちのうしろのうつつる曼珠沙華
 シナモンをさつと振りかけ秋霖デモ
 曼珠沙華神が戦さを引き起こす
 敬老日ルンバボサノバジャズダンス
 善人の顔せし秋刀魚食らいけり
 てのひらで風を動かし阿波踊
 文机に明日の風くる星月夜
 静かなる五輪騒動木の实落つ
 月沙漠に足跡数多歴史かな
 生き抜かなくちや螳螂の斧の切れ

小林 実
 大畑 等
 三須 民恵
 芝崎 梓
 矢野 忠男
 加藤 法子
 長浜 聰子
 徳吉洋二郎
 山崎 幸子
 並木 邑人
 細野 一敏
 細根 栞
 鈴木まほろ
 楠見 恵子
 石井紀美子
 大塚 弘毅
 小高 稔
 椿 良松

柏研究句会報告

(於…柏市「ハツクルベリー」2階)

●第四十回 (平成二十七年九月十二日)

司会 佐藤 鈴子

この星の自転公転台風圏
 集落を守る籬や虫すだく
 カステラをすこし厚目に秋気澄む
 秋桜老いて自在の友のいる
 赤とんぼ叔父が一人で墓守る
 月山の麓に現るる月見草
 百年も経てばこの指曼珠沙華
 第六号円墳を過ぎ栗の飯
 初雁や時に天地が牙を剥く
 絹紐に吊られし火花秋海棠
 風鈴の確かな位置や親の家

長井 寛
 小林 俊子
 栃木 きよ
 イザベル真央
 岡田 春人
 下村 洋子
 小林 実
 大畑 等
 野口 京子
 佐藤 鈴子
 高橋 宗史

●第四十一回 (平成二十七年十月十日)

司会 佐藤 鈴子

竜淵に潜む真昼の印旛沼
 大噓ドミノ倒しの破顔かな
 畑の土爪に残りてとろろ汁
 罫雲空似の人の通り過ぐ
 秋麗を壊してしまった弟よ
 腰据える石工の背中紅葉山
 崩れたる曼珠沙華なら怖くない
 折り鶴に言の葉たたむ十三夜
 ときに僧萩をば縛り立たせけり
 一握の土に宝や天高し

長井 寛
 栃木 きよ
 岡田 春人
 イザベル真央
 下村 洋子
 野口 京子
 高橋 宗史
 小張 直子
 伊藤 希眸
 佐藤 鈴子

新会員・会友紹介

印西市竹袋 渡邊 竹庵(会員)
 (推薦者 大畑 等)

老頭兒の憩ふ長椅子水草生ふ
 二の腕の太き漢や三尺寝
 一釜を塩で握つて今年米

松戸市三ヶ月 中嶋 三雄(会員)
 (推薦者 長峰 竹芳)

読み解きの地方文書や稲雀
 名どころの橋は国道翁の忌
 夏逝くやいくさ重ねし不破の関

柏市西町 大坂 吉也(会員)
 (推薦者 大畑 等)

つきかけ
 月光や出エジプトのビルの街
 マネキンに秋もの着する日の境
 酔ふほどにあれよあれあれ秋の夜

図書紹介

■句集『四季の詩』 山口 夕紀

平成二十七年六月十日 津軽書房

ゼロという豊かさに立つ大枯木

雪だるまときどき人がつまらない

大きくさめたしかに私は生きている

■句集『漂泊』 細根 栞

平成二十七年八月八日 現代俳句協会

すこしずつ何かが壊れ蟻の列

美しき罨ひとむらの曼珠沙華

鳥渡るころか埴輪の泣くころか

■句集『展翅板』 林 ゆみ

平成二十七年九月二十二日 本阿弥書店

靄ぐもり片手はいつも開けており

地団駄を踏めば空落つ四月馬鹿

自分史の最終章は野に遊ぶ

《会員・会友の近況》

・重症心身障がい者の施設で、希望者に俳句指導をしています。句集『風の宿』の出版予定（年内）です。（政成 一行）

・いよいよ秋も関わらなくなって来ましたね。俳句の難しさにどっぷりと漬っています。青葉俳句研究会に行くのを唯一の楽しみにしています。（細野 一敏）

・第27回平和願う美術展にコンピュータアート「渡り鳥」を出品。（樋口 博徳）

・刺激のない当地では現俳についてゆくのはきびしく、老人や病者のお守り役。米寿を超えたので百歳まで頑張るつもり、よろしくお願ひします。足腰が弱って遠出は不可

能です。（中村 悼舟）

・沢山の方々に恵まれ俳句の道に二十数年。雑多な家事に追われておりますが、この道を行けるところまで行きたいと願っております。（保坂 末子）

・毎回現俳千葉お送り頂き楽しみに拝読させて頂いております。年間の行事の数々、役員の方々の御手数程感謝いたしております。酷暑も過ぎ爽やかな刻を迎え五感ゆたかに過ごせる様にと願っております。ありがとうございます。（畠 淑子）

・千葉県現代俳句協会の行事や吟行に参加させて頂いていただきたいと思いつながら、雑事に追われております。来年こそはと思っております。（西澤 繁子）

・只今夫の介護に明け暮れています。（袴田 菊子）

・十一月一日地域の文化祭にフラダンスとコーラスで出演しました。その二、三日前から風邪で抗生物質を投与され、その薬が合わず腹痛と下痢で力が入らず困りました。でも熟年の意地と、こつてりの化粧でどうかのり越えることが出来ました。（原 悦子）

掲示板

《会員・会友異動》

●入会（会員） 大木明子、小多田文子

●逝去（会員） 神山 宏、大谷昌弘

《平成二十七年第三回幹事会》

日時 平成二十七年八月二十五日（火）

場所 船橋市勤労市民センター

議題

一、三十五周年記念俳句大会について

二、第一一八号会報について

三、現代俳句協会（本部）の動向について

四、第二十二回関東申信越・静ブロック連絡会議報告

五、平成二十八年の総会・俳句大会について

六、銚子ミニ吟行句会報告

七、各研究句会の状況について

八、その他

□事務局・編集部だより□

●平成二十八年度俳句大会の作品を募集しています。締切は来年一月三十一日。お早めにご応募くださるようお願いいたします。

会員以外の方、他地区会員も参加できます。なお、総会・大会は平成二十八年三月二十日（日）開催です。

●平成二十八年度春の吟行会、会場は現在未定、期日は四月二十九日（祝日）の予定です。

現代俳句千葉 第一一九号

平成二十七年十二月一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会

会長 大畑 等

現代俳句千葉編集部

〒278-0037 野田市野田六六五番地

松澤 龍一

千葉県現代俳句協会事務局

〒270-1471 船橋市小室町二八〇四

高木 一恵

電話〇四七-四四七-二九一二

FAX〇四七-四四七-二九七二